

## 書生緋

せきね くおん

歳の暮れに埼玉の川越喜多院へお参りがてら、年の瀬に開かれる喜多院境内の骨董布市に寄ってみる。シートや薄縁を敷いた上に、うず高く積まれた古布の中から目に留まったのが、藍が疲れ切った表情をしている古い書生緋の着物だった。昨今の古布ブームで古着も結構なお値段だ。手繰り寄せて見ると思っていたより全体の傷みがひどい。行きつ戻りつしながらも藍の古緋に心惹かれる。

「百年以上前の着物ですよ。藍がまだ生きています」。お婆さんの柔和な目に惹かれ思い切って衝動買いをしてしまう。一抱えほどの古着を持って境内を一巡し、くだんの古着屋を改めて覗いて見るが、早仕舞いしたのかお婆さんの姿も店も見あたらない。あの柔和な目に何やら不思議な懐かしさを感じたのだが……。

黒の太い木綿糸でしっかりと縫いあげる丈夫な書生緋は、裏表のない硬い木綿の織物で幾度も縫い返しや洗い張りができる。表地が焼けると裏表にして縫い返す。書生緋は昔、出世前の若い男子の普段着だった。

この古い書生緋も大切に着たのであるう、継ぎあてや接ぎも多く、昔の女の子の仕事がそこかしこに見え隠れする。丁寧に解いてゆかないと、痛んだ布はぼろ布となって溶けてしまいそうなので、ゆっくりと丹念に根気よく解いてゆく。その過程で縫い手の工夫や丹精さがうかがえ感動さえする。解き終えるとぬるま湯を入れた桶にひたす。しばらく浸けて置くとまっ黒な汚水が浸みだし、百年分の垢や汚れが布の歳月を物語っているように感じる。幾度も丁寧にすすぎ竿に干す頃には、陽の光が透けて見えるほどの柔らかな緋になり、垢や汚れを落として軽くなった明治の着物が、のんびりと風に吹かれゆらゆらと揺れている。

誰がどなたに着せるのに縫ったのだろうか、あのお婆さんが新妻の頃、若い夫に縫って着せたのだろうか……。百年の歳月を経て優しく風に揺れている書生緋を眺め、この紺緋を初めて着た若い男に思いを馳せている。